

論文の和文要旨	
論文題目	親族語を中心としたウズベク語の呼称について ——日本語との対照的観点から——
氏 名	Halnazarov Maamoorjon

本論文では、現代ウズベク語の呼称について、親族内で最も多用されると思われる二人称代名詞や親族語、愛称などを取り上げ、日本語との対照的な観点から検討した。ウズベク語母語話者を対象に行ったアンケート調査や文学作品の会話例などの言語資料の収集・分析により親族呼称の体系や運用面について社会言語学的な観点から考察し、相手との距離や年齢の上下、相手の社会的地位といったさまざまな対人的要因とのかかわりを詳細に検討した。以下では、本論文の要旨を章ごとに述べる。

第1章では、本論文の目的および研究対象について述べた。そして、ウズベク語の先行研究や調査データおよび資料を記述する際の表記や訳などについての説明を行った。

第2章では、ウズベク語の全般的な概説を行った。ウズベク語が話されている地域や方言差などについて述べた後、本論文を理解するうえで必要となるウズベク語の音韻の特徴や文法を概説した。

第3章では、本論文をめぐる基本概念と下位分類を整理した。本論文で扱っている人称代名詞、親族語、愛称をそれぞれ定義した。

第4章では、人称代名詞に関する記述を行った。第一に、現代ウズベク語の二人称代名詞 **siz** が敬称の単数二人称代名詞への変化を遂げつつあることを、ウズベク語の文学作品 27 作品から収集した会話文の資料に基づいて論証した。第二に、二人称代名詞の用法についていくつかの点を明らかにした。(1) 単数形 **sen** と **siz** の使い分け、**sen** と交替形 **san** の使い分け。(2) 複数形 **sizlar** と **senlar** の使い分け。第三に、親称と敬称の使い分けについて、3 点を指摘した。

- ① 一般的な傾向として、自分より年上の親族に対して **siz** (敬称) を用い、年下の親族に対し

て sen (親称) を用いる。嫁や婿あるいは兄弟姉妹の配偶者などに対しては敬称を用いるのが普通であるが、仲良くなると親称に移ることも少なくない。

- ② 夫婦間では、一般に、夫が妻に対して親称を用い、妻が夫に対して敬称を用いるが、女性の社会進出が進むにつれ、互いに敬称を用いる夫婦も増加してきている。
- ③ 非親族関係では、初対面やあまり知らない人、上司や先輩、年上の知り合いなどに対して敬称を用い、友人や年下の知り合いなどに対して親称を用いるのが一般的である。なお、相手が子供である場合は、たとえ初対面でも親称を用いるのが普通である。

第四に、調査で明らかになったウズベク語の人称代名詞と、先行研究から知られる日本語人称代名詞に関するデータとを対照した。相違点としては次の3点が認められる。

- ① 日本語には、二人称代名詞として用いられる語の種類が多く、話し手と聞き手の人間関係によって適宜使い分けられているが、いずれも使用対象及び使用範囲がかなり限定されている。一方、ウズベク語の二人称代名詞は、種類が少ないが、使用範囲が日本語に比べて遥かに広い。
- ② 日本語ではジェンダーによる言語使用の差が大きいですが、ウズベク語ではそのような現象はみられない。
- ③ 日本語では人称代名詞「あなた」や「君」などと呼ばかけ語として用いることができるが、ウズベク語ではそのような用法はみられない。

類似点としては、両言語とも人称代名詞が省略されることが多いということが指摘できる。しかし、省略の要因は、日本語とウズベク語とではそれぞれ異なると思われる。日本語では、敬語表現や授受表現が多用され、これらの表現における人称暗示機能や方向性の明確さが人称代名詞の使用頻度差に影響する主な要因となっている。一方、ウズベク語では、述語の人称語尾が主語の人称・数を表示するということが要因として挙げられる。

第5章では、ウズベク語母語話者を対象に行ったアンケート調査に基づいて、ウズベク語の親族語に関する記述を行った。調査の結果、ウズベク語の親族呼称の使い分けに、年齢の長幼が重要な軸として働くことを確認した他、(1) 父方か母方かによる違い、(2) 身内か否かによる違い、(3) 親疎関係(既知の人であるか否か)、(4) 視点の移動の問題、(5) 接辞添加の問題などといった多くの要素が関与することが明らかになった。具体的な用法について3点を指摘した。

- ① 年齢の長幼が重要な概念として認識されている。自分より上の親族に呼びかけたり言及したりする時は原則として親族語を用いる。自分より下の親族に呼びかける際には、名前や愛称を用いるが、言及する際には、話し相手との親疎関係によって親族語を用いる場合がある。そのほか、父方か母方かによる違いが目立つ。
- ② 夫婦の場合、夫は妻に名前や愛称を用いて呼びかけ、妻は夫に感動詞を用いて呼びかけるか、名前に親族語を付けて呼びかける。子供や孫が生まれた後は、家族の最年少者の立場に

視点を移動して配偶者に呼びかける傾向がみられた。言及の際には、話し相手が親族・姻族であるか否かによって視点移動に異なりがあることがわかった。

- ③ 親族内で、年少者との会話において親族の誰かを話題にする時や、年少者に話題の第三者として言及する際には、年少者の立場に視点を移動して間接的に表現する傾向がある。

次に、日本語母語話者を対象に行った同様のアンケート調査の結果と比較して、両言語の親族呼称の用法について共通点と相違点計7点を指摘した。

- ① ウズベク語では、同一の親族語が複数の親族関係に対して用いられることがある。
- ② 両言語とも、親族成員間での呼びかけにおいては、自分より上の世代の親族は親族語で呼びかけ、下の世代の親族は名前や愛称で呼びかける。しかし、日本語では、上位世代の親族に対して「名前+ちゃん/さん」で呼びかける例も観察されたが、ウズベク語ではそのような用例はみられない。
- ③ ウズベク語では、兄・姉のみならず、年上のいところに対しても親族語で呼びかけるのが普通である。一方、日本語では、兄・姉に対して名前やあだ名など非親族呼称を使用する人が多く、同世代間の年齢の上下はそれほど重要視されていないようである。
- ④ ウズベク語では、祖父母やおじ・お婆の場合（いところの場合は言及用法に限って）、父方と母方で形式の相違がみられるが、日本語においては、そのような区別はみられない。
- ⑤ ウズベク語では、年下の親族に対しても親族語を用いて呼びかけることが可能である。一方、日本語では、そのような用例はみられない。
- ⑥ 日本語では、夫婦間の呼称において年齢差による上下関係が成立しておらず、互いに名前や人称代名詞で呼び合うことができるが、ウズベク語では、夫に対して人称代名詞や名前だけで呼びかけることはできず、hey、hoy などの感動詞を用いて呼びかけるか、「名前+aka」というふうに、名前に親族語を付けて呼びかけるのが普通である。しかし、子供が生まれると子供の立場に視点を移動して配偶者に呼びかけるという点では両言語で共通である。
- ⑦ 両言語とも、自分より下の世代の親族との会話では、親族の誰かについて話す時、自分と言及の対象者との親族関係を直接表現しないで、年少者（下位世代の親族）の立場に立って間接的に表現する。しかし、ウズベク語では所有二人称接尾辞を付けて「あなたの」と言わなければならない。

第6章では、ウズベク語での愛称形成法に関する記述を行った。ウズベク語母語話者にウズベク人の名前494例を示し、それに対して回答者が知っている愛称形を回答してもらい、回答をデータとして形態音韻論的観点から分析を行った。その結果、愛称形成法に、一部省略と接辞添加という二つの方法があることが明らかになった。一部省略の仕方には、前部省略や中部省略、後部省略などがある。また、接辞にはš(-oš/-oš)、-i、-a(-ha)や、ロシア語由来とみられる-ik、-ka、-yaなどが見られた。また、今回の調査の結果と先行研究から知られる日本語の愛称形成法に関するデータと

を対照した。共通に認められたのは以下の諸点である。

- ① 省略による愛称形成がみられる。大きく前部省略と中部省略と後部省略に分けられる。
- ② 接辞添加による愛称形成がみられる。
- ③ 構成要素の反復による愛称形成法がある。
- ④ 一つの愛称形が違う個人名の愛称形にもなりうる。

一方、相違点としては、次の諸点が認められた。

- ① 日本語の愛称は姓・名の双方から作られるが、ウズベク語の愛称は個人名からのみ作られ、「祖父名（または曾祖父名）-ov (-yev)」や「父名-ovič (-yevič)」からは作られない。
- ② 日本語には、「鈴木→すーさん」「佐々木→さーさま」のように、姓や名の第一音節を取ったもの、「てづか・みなこ→てづかみ」「くらた・まゆみ→くらたま」のように、セグメンテーションの変更によるものなど、さまざまな愛称形成法がみられるが、今回の調査の限りでは、ウズベク語にはこのような愛称形はみられない。

第7章では、本論文で明らかになった現代ウズベク語の親族語を中心とした呼称の特徴及び日本語との異同を再確認し、今後の課題について述べた。

この論文の意義は次の諸点にあると考える。

- ・ ウズベク語の呼称に関する最初のまとまった記述研究である。
- ・ 事例調査やアンケート調査に基づいた実証的な研究である。
- ・ 記述の観点を設定する際に日本語の敬語研究の蓄積を応用した。
- ・ 従来複数二人称代名詞として扱われてきた *siz* が今や敬称の単数二人称代名詞としての用法が主であることを指摘した。
- ・ 二人称代名詞を親称と敬称という観点から分析し、その使い分けに応じて変化する所有人称接尾辞と動詞の人称語尾系列を見直した。
- ・ 親族呼称の使用において、年齢の長幼が重要な軸として働くことを確認できたほか、父方か母方による違い、親疎関係、視点移動の問題、接辞添加の問題などといった多くの要素が関与することが明らかになった。
- ・ 愛称研究で従来無視されていた「省略」という形成手段に注目した。
- ・ 接辞添加による愛称形成において、従来指摘されてない三つの愛称形成接辞が発見できた。
- ・ ウズベク語の呼称と日本語の呼称を対照して、大きな違いと共にわずかではあるが類似性も見いだせた。